

書評 「二重造影法」 白壁彦夫編

早期胃癌検診協会 中央診療所 高田 洋

本書を手にして、ついに出了という深い喜びを感じたのは私一人ではなかったらうと思う。

今日わが国で消化管のX線診断に繁用されている二重造影法は、充盈像と並ぶ大きな柱となっていることは衆知の通りである。大腸の検査に用いられていた二重造影法を上消化管診断に応用し、今日の確固たる診断価値を与えたのは白壁、市川、熊倉氏らの偉大な功績である。X線診断にたずさわる医師なら、今日至極あたりまえの技法として日常安易に応用されるまでになった本法ではあるが、一步退いて反省する時、本当に二重造影法の最大の診断的効果をあげているかどうかは疑問な場合も少なくはない。おぎなりの不十分な二重造影像でお茶をにごし、本当の意味での二重造影法の特徴を発揮できていないフィルムを見かけることも多い。編者の白壁教授がその序文で記しているように「偶然にえられた撮影像ではなくて、計算された。しかも予定通りに撮らなくてはならない撮影像」というのが今日の要求なのである。Area gastricae のレベ

ルに於て病変が論じられ、診断しようとして努力している時代である。本書はこうした最良の二重造影像をとるための解説書であり、指導書である。

しかも、二重造影法による胃疾患の診断・研究について長年にわたり心血をそそいだ御本家白壁一門の人人が、自分達の苦勞した撮影技術を懇切丁寧に、つつみかくすことなくさらけだして頂いたことに心からの敬意を表したい。

第1部に於て述べられた二重造影法の理論および利点と欠点をよく理解し、第2部における撮影技術に関する記述は、術前準備・バリウム・空気注入法・量・撮影条件に始まり、体位・ルチーン検査と精密検査でのX線検査法の組み合わせおよび選び方に至るまで微に入り細にわたった説明をよめば、誰しも自分にだってできるという自信をうえつけられるであろう。ここまではまことに好適の入門書である。実に第3部では一段レベルの高い二重造影法による診断について、改良と進歩と題した記述がなされているが、本法の進歩発展の過程をくみとることができる。

したがって、これからX線診断を始めようと思う方々には最良の手引となり、それに従って実際に撮影されたフィルムを手にする時、大きな勇気を与えられるであろうことを確信するものである。また既に現在X線診断にたずさわっている人々にはもう一度謙虚な気持で本書を通読されんことをおすすめしたい。そこには二重造影法の研究・発展に努力した同門の人達の苦心のあとが、紙面を通してひしひしと感じとれるからである。

Prof. W. Frik, Prof. P. J. Hodes, Dr. H. U. stössel らの「二重造影像の撮し方を、理解し易いように書くことだ。多くの人々がその恩恵をうけるのだ」という強いすすめもあって本書をものにしたと書かれているが、外国の人々——やがて本書の欧文版が出ると聞いているが——のみならず、より小さい、より浅い早期胃癌の診断をめざして努力しているわが国のわれわれ臨床医にとっても本書の出版はまことに意義深いものであると思う。私自身も座右の書として熟読し反省の資としたいと思う。

B5 236頁 図181

定価 5400円 文光堂